HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	記憶の継承過程における個人的記憶の想起と接続 ： ダークツーリズムの語りを事例として
Author(s)	鈴木, 里奈
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 35, 39-54
Issue Date	2022-11-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88247
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_suzuki_no.35.2022.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

記憶の継承過程における個人的記憶の想起と接続
――ダークツーリズムの語りを事例として

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院　博士課程
鈴木　里奈

Recall and Connection of Personal Memories in the Inheritance Process of Memory ――Analysis of Narratives Expressed in Dark Tourism

SUZUKI Rina

abstract

Through a case study of dark tourism in a coal mining heritage site, this paper clarifies one aspect of the memory inheritance process: what kind of negative memories are accepted and shared by individuals. Specifically, the collective memory theory was used in a partially extended form to deepen the discussion based on the feedback received during the exchange of opinions at the end of each tour and the interviews conducted later with the organizers and several participants. As a result, it became clear that episodes connected to each participant's personal memories were selected from the complex negative memories of the coal mine. The episodes were then incorporated into the collective memory by connecting them to the larger problem awareness concerning coal mines.

1 はじめに――問題の所存

記憶は、いかに共有され継承されるのか。本稿では、ダークツーリズムを事例として、いかなる負の記憶が、どのように個人に受け入れられ共有されるのかという記憶の継承過程に光を当てる。その際に、特に集合的記憶論を参照し、それを一部拡張する形で、個人的記憶の想起と集合的記憶との接続について考察してみたい。

記憶はつねに想起と忘却の狭間にある。戦後75年を迎え、実際に戦争を体験した人が急減するなか、日本は記憶の継承問題に直面している。たとえば広島では、被爆体験の継承に際し「何を継承するのか、できるのか」（川野 2018：99）という問いが浮上している。こうした負の記憶を、観光をとおして継承しようとする試みのひとつが、ダークツーリズムである。ダークツーリズムとして「福島第一原発観光地化計画」を提案した東浩紀は、この計画の目的を記憶の風化への抵抗だとしている（東 2013：17）。

ダークツーリズムという概念は、1996年にジョン・レノンとマルコム・フォーレーにより提起され、観光研究で用いられるようになった。研究者により定義は若干異なるが、観光学者の井出明が「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶を巡る旅」（井出 2018a：20）と表現したように、人類の負の記憶と結びついた場所を目的地とする点で、概ね一致している。また、ここ10年の研究で、ダークツーリズムの動機は、多くの場合ヘリテージツーリズムとほとんど変わらないことが明らかになっており、そうした場所への訪問は、地域の暗い記憶や歴史に触れる旅であり、深遠で非常に意味をもつ可能性が繰り返し指摘されてきた（Light 2017: 287）。

ダークツーリズムの対象として、戦争遺構や災害遺構に並び注目されているのが、炭鉱遺産である。たとえば、軍艦島（端島）は、広島の原爆ドームや沖縄のひめゆりの塔に並び、ダークツーリズムの対象として頻繁に紹介される。ただし、炭鉱遺産は多様な解釈が可能であることから、記憶の対立に起因する表象の問題を抱えている（木村 2014）。負の記憶をもつ遺産は、観光対象となることで、記憶の対立が顕在化する場合がある（上水流編 2022：42-43）。こうした遺産をめぐる記憶の対立は、社会学の観点から問題視されてきた。

たとえば、深谷直弘（2014）は、多様な歴史解釈が可能な被爆建造物の保存問題を事例に、場所の記憶をめぐる対立と矛盾を指摘した。この研究は、モノや場所を媒介とする記憶継承の難点を指摘したことに意義があるが、それをどのように乗り越えて記憶を共有しうるかという点が考察に含まれていない。一方で、松浦雄介（2018）は、記憶が対立している状況を踏まえ、負の記憶が公共的な性質をもつ記憶になっていないことを指摘した。ただし、彼は負の記憶が継承される可能性を否定したのではなく、炭鉱の記憶を後世へと保存し、活用しようとする取り組みを示し、「それらが記憶の世代間継承をどのように可能にするか、今後注目してゆく必要がある」（松浦 2018：

160）と述べた。こうした研究では、遺産をめぐる記憶の対立の状況が明らかにされたが、記憶の継承への第一歩である記憶の共有については展望を述べるにとどまっており、本稿はここを問題としていく。

炭鉱遺産の負の記憶の多様性は、ダークツーリズムのガイドブックからも読み取れる。そこでは、軍艦島は日本の産業の発展と衰退を観ることができる場所として紹介され、コンクリートと自然の対比から、エネルギー問題や環境問題を再考するメッセージを発していると記述される（いろは出版編 2016：34）。加えて、軍艦島では事故や過酷な労働が行われた事実もあり、これらも負の記憶である。こうした多様な記憶を、画一化せずに、証言として保存する試みが行われているが（水島 2020）、記録された多くの記憶の中から、いかなる記憶が個人に選択され受容されるのかについて、考察は深められていない。

一方で、建築・都市計画学の観点からは、記憶を継承するために遺産の空間を保存する意義が論じられ、特に負の遺産といった価値が固定されない対象について、その必要性が示された（窪田 2014；清水・中村2018）。空間が保存されることで、観光や訪問学習といった地域を越える記憶の継承活動が可能になることから、悲劇を想像するきっかけとして、空間を残すことの意義が強調された。そこでは、地域住民同士の空間をめぐる意見の対立が明らかになり、地域住民同士でその意義や価値を議論する必要性が示された（筈谷・阿部 2019，2021）。しかしながら、こうした研究では空間の保存に力点が置かれるため、空間を訪れることで記憶が共有される過程は不明確なままである。

以上をふまえ、本稿では、負の記憶が個人に受容・共有されていく過程を明らかにしていきたい。そのために、炭鉱遺産で行われたダークツーリズムのツアー「ダークツーリズムで巡る北海道近代史」に着目し、主催者と参加者がツアーを契機に想起した個人的記憶の内実を明らかにする。筆者は、ツアーの下見や移動の補助を行いながら、参与観察した。分析に用いるのは、ツアーの最後に設けられた意見交換の場での感想と、別途、主催者と参加者数名に対して行った聞き取り調査の結果である。

先述したように、炭鉱遺産は複雑な負の記憶を抱えているため、事例として選定した。旧産炭地では、その地域に住んでいる人でさえ、社会的な背景と立場によって異なる記憶をもっており、負の記憶が指し示すものは様々である。そうした多様な記憶の中から、特定の負の記憶が選択され、共有されていく過程を明らかにしていく。

2 理論的枠組み——集合的記憶論

本稿は、集合的記憶論を参照し、それを一部拡張する形で用いる。まず、集合的記憶に関する研究の流れと、記憶の継承における集合的記憶の位置づけを整理しておきたい。

モーリス・アルヴァックスにより提起された集合的記憶は、様々な学問分野にわたり取り上げられてきた。近年、集合的記憶の研究が盛隆した背景には、世界的な大戦の勃発と、社会構造の変化が挙げられる。たとえばドイツでは、ホロコーストならびに第二次世界大戦を経験した世代が減少したことで、集合的記憶が盛んに議論されるようになった（齊藤 2007：239）。

アルヴァックスの記憶理論を発展させたアライダ・アスマンは、集合的記憶を「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」という二つの概念に区分した（安川 2008：282-99）。前者は自然発生的に形成される最近の過去の経験を指し、共同体の変遷によって変化する短期的な記憶である。後者はメディアなどの外部装置に依存し構築された、長期的な記憶を指す。アルヴァックスが集合的記憶論において問題としたのは、「空間的・時間的にともに存在することで結合される集団」（Assmann 1999＝2007: 161）に担われる短期的な記憶であり、アスマンが「コミュニケーション的記憶」と表現したものであった。

それに対して、ピエール・ノラは、集合的記憶が「記憶の場」に刻まれることで、世代を越えて想起されることを指摘した（Nora 1984＝2002）。記憶の場は「もはや生きていないが、完全に死んでもいない」（前掲書：37）と表現されるように、集合的記憶が繰り返し想起される場である。本稿も、集合的記憶を、想起と共有を繰り返しながら場所を介して時空間を越えて想起される記憶の枠組みとして位置づけており、記憶の継承に重要な役割を果たすものとして認識している。

次に、本稿で核となる集合的記憶と個人的記憶の相互作用について整理しておきたい。集合的記憶は、個人がもつ記憶の集合であるため、集合的記憶を論じる際には、記憶を想起する個人に着目する必要がある。しかしながらアルヴァックスは、個人的記憶も、その個々人が属する集団の観点から想起される、社会的なものであることを示した（Halbwachs 1950＝1989: 1-44）。そのため、記憶の共有とは、「個人が属する社会環境（社会集団）によって提供される観念やロジック」、つまり「社会的枠組み」の共有であるといえるかもしれない（浜井編 2017：6）。

ただし、人々は、国家など大きな枠組みだけでなく、社会の中で多数の小さな集団に属しており、ミクロな視点で見ればすべての集団を共有しているわけではない。個人的記憶は、そうした異なる集団の観点から、想起と忘却のプロセスをとおして行われる、過去の選択的な再構成の結果である。したがって、共有できる記憶と、共有しえない記憶があるという仮説が浮かぶ。なぜならば、個人的記憶は集合的記憶の一側面であり、それは現在の集団の観点に由来するため、「大量の共通の想い出は相互に依拠し合っているが、そのうちで、各々の成員に最も強い印象をもって現われるのは、同じ想い出ではない」（Halbwachs 1950＝1989: 43）。

しかしながら、集団が異なることで、記憶を共有できる可能性が断たれているわけではない。人々は、特定の記憶をもつ集団と接触することによって「この集団と一体化し、われわれの過去をこの集団の過去と混同しつづけることができる」ため、想い出を共有しうる（前掲書：7）。つまり、個人的記憶が、

異なる集団が持つ集合的記憶との接点を持つことで、記憶が共有される可能性がある。

以上のような集合的記憶論を基盤として、集合的記憶と個人的記憶の関係性をもとに、個人的記憶の想起と、集合的記憶との接続に着目することで、異なる集団の観点を保持する人々が、負の記憶を共有する過程を明らかにできる。

3 事例——ダークツーリズムで巡る北海道近代史

3.1 ツアーの概要

ダークツーリズムのツアー「ダークツーリズムで巡る北海道近代史」は、2020年から2年に渡り、北海道空知の三笠市を舞台に開催された。第一回は「幌内炭鉱の記憶」をテーマに、2020年10月10日に、第二回は「幾春別・住友奔別炭鉱の記憶」をテーマに、2021年10月10日に開催された。どちらも、主催・企画は「ギャラリー茶門」のA氏であり、案内人・現地コーディネーター（以後、ガイドと表記）を務めたのは、「みかさ炭鉱の記憶再生塾」事務局長のB氏であった。

それでは、2020年を例に、当日のツアーの流れを説明しておきたい。最初に、A氏とB氏、そして参加者同士が簡単に自己紹介をしたあと、車で移動し、三笠に残る炭鉱遺産をB氏のガイドで巡るという構成であった。ツアーは、榎本武揚ら明治の要人たちが開拓の際に周囲を見渡した「達布山展望台」、幌内炭鉱で採炭に従事した囚人が収容されていた空知集治監跡に残る「空知集治監典獄官舎レンガ煙突」[1]、空知集治監の囚人たちの墓がある「千人塚史跡公園」[2]を訪れたあと、「幌内炭鉱自然公園」に残る「北炭幌内炭鉱変電所」や「音羽坑」などの遺構を巡った。千人塚史跡公園では線香をたむけるセレモニーが行われたほか、幌内炭鉱自然公園の音羽坑の前では「朝鮮人犠牲者、労務慰安所、炭鉱犠牲者追悼」のつどいが行われた。その後、人々の暮らしを偲んで旧幌内市街を一望し、炭鉱の暮らしを支えた商店のひとつである「太田金物店」を訪れた。ツアーの最後には、参加者同士が感想を述べ、意見交換をする時間が設けられた。最後に、参加者はリンゴや栗といった秋の味覚を手土産に、帰路についた。

2021年は、コースを変えて、「旧住友奔別炭鉱立坑櫓」「コンクリ橋（川向橋・幾春別橋）」「魚染の滝」「幾春別神社と周辺散策」「弥生墓地内、友子の墓」「弥生地区炭鉱住宅、朝鮮人集落跡」などを巡った。音羽坑の前では、昨年と同様に犠牲者を追悼するつどいが行われ、その後、現地で参加者同士が感想を語り、意見交換を行った。

ここで、調査方法と対象について、改めて述べておきたい。本稿は参与観察を主な方法としている。これから登場する参加者の言葉は、両日ともにツアーの最後に設けられた参加者同士の意見交換会での発言を用いている。意

►1 1901年に廃止されるまで、空知集治監の囚人たちが幌内炭鉱での石炭の採掘に従事していた（三笠市立博物館 2022）。

►2 空知集治監の囚人は道路の開拓や石炭の採掘などを行っており、死亡者は、空知集治監があった1882年からの20年間で1000名を超えた（三笠ジオパーク 2022）。

見交換会は、2020年はB氏の自宅で座りながら行われたが、2021年はスケジュールの都合上、犠牲者を追悼するつどいが終了した後、現地にて立った状態で行われた。参加者全員が円形に並び、順番に発言しており、お互いの感想を聞きあった。感想の内容と長さは人により異なり、参加の動機やツアーを通して考えたことが述べられた。筆者は、その時の発言を研究のために許可を得て録音して、後日文字にして用いている。また、2021年のツアーの昼食時に、参加者に対してA4用紙1枚の質問紙による簡単な調査を行い、参加者の属性の把握につとめ、22人から有効回答を得た。後日、主催者と参加者数名に対して対面または電話での聞き取り調査を行っており、詳細は以下の表1に示す。本稿に登場する参加者の年齢と居住地など詳細に関しては、同表を参照されたい。

■表1　聞き取り調査における対象者の属性

	年齢	性別	居住地	追加調査
主催者A氏	70歳（2020年10月）	女性	札幌市	2022年4月16日
ガイドB氏	69歳（2020年10月）	女性	三笠市	
参加者C氏	57歳（2021年10月）	女性	札幌市	
参加者D氏	60歳（2021年10月）	女性	江別市	2022年4月9日
参加者E氏	68歳（2021年10月）	女性	江別市	
参加者F氏	33歳（2020年10月）	女性	東京都	
参加者G氏	53歳（2020年10月）	男性	札幌市	
参加者H氏	75歳（2021年10月）	男性	遠軽町	
参加者I氏	82歳（2021年10月）	男性	新得町	2021年7月11日
参加者J氏	49歳（2020年10月）	女性	札幌市	
参加者K氏	65歳（2020年10月）	男性	札幌市	
参加者L氏	67歳（2020年10月）	男性	音更町	2022年8月4日

参加者は、各回とも25名程度で、ツアーの一部分のみ参加した人もいた。A氏やB氏の声掛けによる参加者もいれば、新聞の記事で開催を知った人もいた。札幌からの参加者が多かったが、遠軽町や音更町など道内各地や、遠方からの参加者もいた。彼らは、今回のツアーを、影の歴史を知ることができる機会として期待していた。

> 私は、化石燃料という分野がとても好きなので、そこに興味を持って、いろんな炭鉱のアートとかを巡るようになりました。光と影があるということで、光の部分しか見ていませんでしたけど、今日は影の部分も見れるということで、とても興味を持って参加させていただきました[3]。

> （筆者注：三笠で過ごした幼少期は）私の子供時代の光の当たる部分で、何かきっとあるぞっていう、何か隠されたものがあるぞ、というような。黙って大人が言わないことがあるっていうふうに思ってました[4]。

以上が、影の歴史を観ようとする参加者C氏とD氏の感想であった。一方で、

►3　2021年10月、参加者C氏の感想より抜粋。

►4　2021年10月、参加者D氏の感想より抜粋。この参加者は、三笠に祖父の家があり、幼少期に幾度も三笠を訪れた経験がある。

鈴木　里奈　SUZUKI Rina

申し込み時にダークツーリズムであることを気に留めていなかった参加者E氏は、「お恥ずかしながら観光のつもりで来ました」と述べたが、続けて「今日のツアーで、実際に自分の目で見て肌で感じて、今まで私が一般メディアで知っていた知識と違った思いを身体に感じました。こういうことは二度と起こしてはいけないと思いながら、声とか、自分のできることで関わらなきゃと思いました」[5]と語り、ダークツーリズムの意義を実感していた。

►5　2021年10月、参加者E氏の感想より抜粋。

3.2　主催者A氏と、ツアーの意図

A氏は、「日本軍『慰安婦』問題の解決をめざす北海道の会」の共同代表を務めており、講演会や学習会、上映会を行っているほか、慰安婦被害者の女性を招き、証言を聞き意見を交換する集会を開催している。このように、A氏は慰安婦問題に強い関心を持っており、ツアーでも朝鮮人の強制労働の問題が一番押し出されたものの、B氏は炭鉱の負の記憶を余すことなく参加者へ語った。

ツアーの開催地として炭鉱遺産を選択した理由について、A氏は、九州の炭鉱を含む産業遺産群が世界遺産に登録される際に、朝鮮人の強制労働の問題が顕在化したことを挙げ、炭鉱遺産は朝鮮人に関わる問題の明瞭な象徴だったと言う。また、A氏は、ダークツーリズムという言葉を用いた理由について、次のように述べた。

> 何があったのかを、すごく前向きに知ってほしいという意味。負だけど負じゃない、負という意味でダークツーリズムを使っていない。そこから学んで次に何をすればよいか、考えるきっかけにしたい[6]。

►6　2022年4月16日、主催者A氏への聞き取りから抜粋。聞き取りは、札幌市内の公共施設にて対面で行い、その場にいたのはA氏と筆者であった。

ツアーには、様々な団体で積極的に活動している人が参加していた。具体的には、北炭夕張新炭鉱のガス突出事故の裁判に支援をしていた人、地元の産業遺産の保存活動やガイドを行っている人、沖縄の基地を考える会に参加している人、道内のイトムカ鉱山の跡地周辺に慰霊碑を建立しようと活動している人、日朝協会の人など多様であった。そして、証言を書き留めたり写真に記録したり、伝えることを目的とする新聞記者、出版社の人、民衆史の映像記録を残す活動をしている人など、負の記憶を記録しようとする人々も参加していた。

3.3　炭鉱遺産の負の記憶と、輝かしい産業としての表象

ここで、ツアーに関する議論を進める前提として、炭鉱に対する社会のイメージと、炭鉱遺産の負の記憶を整理しておきたい。炭鉱遺産を研究対象としてきた木村至聖は、「『一般社会』から逸脱したものとして自らの炭鉱のイメージを見ようとする社会的なまなざし」（木村 2013：122）の存在を指摘した。また、空知に拠点を持つNPO法人炭鉱の記憶推進事業団の理事長である吉岡宏高は、炭鉱遺産の保存・活用について「その活動は地域内外ともに持つ『負の遺産』というマイナスレベルからのスタートだった」（吉岡 2012：2）

と述べている。これらは、炭鉱に対して否定的なイメージが社会に浸透していることを示唆している。

また、負の記憶は「国家の近代化という文脈のなかで常に抑圧されてきた記憶」（木村 2014：87）でもある。木村は、より具体的に、炭鉱における負の記憶を次の四点に整理している。第一に「落盤やガス爆発など坑内事故、危険な労働環境」、第二に「労働条件をめぐる過酷な対立」、第三に「解雇された炭鉱夫の再就職の困難や家族の不安、そしてコミュニティの解体、産業基盤を失った地域の衰退」といった炭鉱の閉山にともなう諸問題、第四に「捕虜や囚人、さらに戦時中の朝鮮人・中国人などの強制労働」である（前掲書：86）。

こうした状況は、北海道の旧産炭地においても同じである。地方紙である北海道新聞には、第三の問題が特に大きく取り上げられた。炭鉱の閉山によって、北海道の旧産炭地の人口は急減し、コミュニティは崩壊の危機に瀕した。三笠に隣接する夕張では、人口がピークに達した1960年4月に116,908人を記録したが、1995年10月1日の段階で17,895人にまで落ち込んだ（『北海道新聞』1995年10月19日）。

三笠も同じように人口が急減し、幌内炭鉱の閉山時に「まちが沈んだよう」になっていると表現される。そして、「もし閉山となれば、これが『お別れ運動会』になる家族も多いのでは」と書かれる（『北海道新聞』1989年9月11日）。これらの表現から、密接な関わりを持ち生活してきた炭鉱町の人々との交流を絶たれ、別の土地へ仕事を求めて移動しなければいけない人々の寂しさや心理的な暗さが感じ取れる。

北海道新聞では、2000年以降、旧産炭地に暗いイメージが流布していることを前提とする記事が増える。また、閉山に対抗するストライキや条件闘争、炭鉱事故の訴訟やじん肺訴訟の記事がいくつも掲載される。さらに、閉山が進む1980年代後半、記事には「切り捨てられた」という表現が頻発し、日本のエネルギー政策を問題視する声が挙がった。そして、サハリンや北海道の炭鉱での強制労働にまつわる記事が頻繁に掲載され、残留朝鮮人の存在が認識されるとともに、会社と国の責任が問われた。

しかし、こうした状況に反して、炭鉱遺産が観光の対象として認識された当初、炭鉱は、暗い側面を打ち消す形で表象された。炭鉱遺産は、日本の経済発展と戦後復興を支えた輝かしいものと表象され、このとき、少なからず影から光へのコンテクストの転換が行われた。経済産業省は、2007から2008年度にかけて、全国各地に点在する近代化産業遺産を「我が国の産業近代化の過程を物語る存在」と位置づけ、個々の産業遺産を近代化の歴史の中へ組み込んだ（経済産業省 2008）。このとき、北海道からは「我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群」が登録されており、ツアーで訪れた北炭幌内炭鉱変電所は構成要素のひとつであった。だが、そこで表象されるのは、北海道開拓に伴う炭鉱開発と輸送のための鉄道と、日本を近代国家に押し上げた石炭産業の軌跡であり、負の記憶は一切登場しない。

加えて、今回のツアーで訪れた炭鉱遺産には、日本遺産[7]「本邦国策を北

►7 日本遺産とは、「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを『日本遺産（Japan Heritage）』として文化庁が認定するもの」（文化庁 2022）であり、ストーリーに不可欠な有形・無形の文化財の総合的な活用を支援している。

海道に観よ！――北の産業革命『炭鉄港』」（通称、炭鉄港）の構成文化財も含まれていた。日本遺産のストーリーでは、炭鉱は産業と北海道の発展に貢献したことが強調されるが、負の記憶に関する記述は少ない[8]。

炭鉱遺産の一面的な表象は、しばしば問題視されてきた。B氏は、こうした状況は地域の実状に即しておらず、負の記憶を含めた炭鉱遺産を伝えたいと話す。次に、B氏がどのような観点からガイドを行ったのか、みていきたい。

3.4　ガイドB氏の語り

B氏は、先述したように、みかさ炭鉱の記憶再生塾の事務局長である。みかさ炭鉱の記憶再生塾は、1999年から幌内炭鉱自然公園の整備やガイドを行い、炭鉱の記憶を後世へと伝える活動を行っている。B氏は、失われてゆく炭鉱の記憶を留めようと、20年以上に渡り人々の証言を聞いてまわった経歴をもつ。

近年、記憶の継承において、証言の価値が見直されている。特に、戦争体験や災害の体験を後世に伝達するときに、その体験をよりリアルに、細かいディテールを保持したまま伝えられるのが証言であり、それは周縁化された人々への注目を促す。「そこでは、エリートによってつくられ、語られてきた『正史』とは異なる物語――ときにそれらを真っ向から否定するような対抗的物語（カウンター・ナラティヴ）」（宮坂 2020：55）が語られる場合もある。それでは、参加者はB氏のガイドをどのように受け止めたのか、参加者F氏とG氏の感想をみていこう。

> ダークツーリズムに出会うきかっけとして、炭鉄港に対する強烈な違和感からはじまって、（筆者注：日本遺産の説明では）こんな最先端で凄いと言っているけれども、人の生活が全然見えてこない。B氏の話で、労務慰安所の前に列があって、（筆者注：配給だと勘違いして）そこに並んだら違ったみたいな、そういう人の話が、ものすごく面白かった。暮らしていた人がどうだったか、そういうのに触れる機会はなかったので、すごく大切だと思った[9]。

> 原子力と石炭というエネルギーと、それによる衰退という共通項を感じた。福島の場合は帰還困難区域と中間貯蔵施設という無機質な言葉で語られることが多いですけど、そこには、それまで人の営みがあったわけで。そういう意味でも、B氏のされてきた聞き取りの作業が大事だなと思った[10]。

このように、B氏のガイドは、観光の場における炭鉱遺産の表象と対照的であり、証言を織り交ぜながら地域の負の記憶をリアリティ溢れる表現で伝えるものだった。井出は、ダークツーリズムが記憶の継承手法として極めて有効である理由のひとつとして、「権力者に都合の悪い非正史に出会うことができるという特徴」（井出 2018b：29）を挙げる。生の声を拾い、人々の生活の話を交えながら負の記憶を伝えるB氏のガイドは、普段は耳にする機会の

►8　もちろん、これは地域にある暗いイメージを払拭し、誇りへ転換しようとする観光の戦略として意義があり、本稿はこれを否定するわけではない。

►9　2020年10月、参加者F氏の感想より抜粋。

►10　2020年10月、参加者G氏の感想より抜粋。

少ない貴重な内容として受け止められた。そして、B氏のガイドによって地域の人々の証言に直面した観光者は、自らの視点に立ち返り、文脈を再解釈することを求められた。それでは、彼らはどのように記憶を受け入れていったのか、詳しくみていこう。

4 個人的記憶と、異なる集団が持つ集合的記憶の接続

4.1 囚人と強制労働の話

本章では、参加者が意見交換の場で述べた感想をもとに、集合的記憶論を参照しながら、個人的記憶の想起と集合的記憶との接続について考察する。

ツアーの参加者は、それぞれの興味関心に沿って、参加者自身がもつ知識や経験と関連づけながら感想を述べた。なかでも、参加者自身が住んでいる場所の出来事と関連づけた感想が、いくつか確認できた。たとえば、遠軽からの参加者H氏は、自身にとって馴染みが深い囚人道路である国道39号線を紹介しながら、次のように述べた。

> 網走から旭川に向かっての国道。俗に言う囚人道路ということで。ここの工事に関しては、朝鮮人の方は、時代が時代なもんですから、連れてこられてないわけですね。ほとんど日本の刑務所、受刑者が行った工事です。亡くなった方、そういう人はほとんどが放置されたような状態で。そのあと、地元の住民たちが埋葬したという形になります。だから、ここと違うのは時代の背景。時代が同じであれば多分、朝鮮労働者の方もおられたんだろうと思います[11]。

また、新得からの参加者I氏は、機関士であった自身に馴染みのある旧狩勝線を例に挙げ、隧道を掘削する際に酷使されたタコ部屋労働者の話をした[12]。タコ部屋労働者は、必ずしも囚人ではなく、うまい儲け話に騙された人々が逃げられない環境下で働かされていたケースもあったと言う。I氏は、タコ部屋労働者の歴史を含む、旧狩勝線の近代化遺産の保存活動に長年携わっていた。ほかにも、数名から、強制労働に関する話があがった。

こうした語りから、彼らは、人々が強制的に働かされたという部分において、記憶を共有していることが分かる。そこでは、朝鮮人か日本人か、囚人かという区別を越えて、共通の認識が生じる。過酷な環境下で労働させられた人々の問題として捉えると、そこには囚人の労働が当てはまる。

ダークツーリズムの対象となるのは、戦争、労働者への過剰な搾取、強制的な人の移動など「主権国家体制の中で弱い立場におかれた者たち」（井出2018b：17）であり、ダークツーリズムは近代の構造的な矛盾を批判的に検証する試みである。参加者は、たとえA氏と同じ集団の観点から記憶を想起できなくとも、共有できる部分がないとは限らない。

►11 2021年10月、参加者H氏の感想より抜粋。

►12 2021年10月、参加者I氏の感想を要約。I氏は2020年のツアーにも参加しており、個人情報は2021年7月11日にI氏の自宅兼私設博物館にて対面で行った聞き取り調査の内容に基づく。聞き取りの場には、I氏とI氏の妻、筆者と筆者の同行者の4人がいた。

参加者は、臨場感を持って死にまつわる出来事を感じるために、個人的記憶を想起し、それに関連づけた感想を述べたと考えられる。ここから、炭鉱がもつ複雑な集合的記憶から、個人的記憶と接点をもつエピソードが選択され、より大きな問題へと関連づけられていく様子がわかる。

また、台湾の日本時代の建造物に向けられる観光のまなざしを分析した藤巻正己は、植民地支配という負の記憶を伝える遺物や場所が、21世紀において「単に〈負の遺産〉としてではなく、むしろ台湾が経験してきた歴史を振り返る〈記憶装置〉として」機能し、表象の文脈に包摂されつつある状況を指摘した（藤巻 2019）。ツアーの中で、炭鉱遺産は戦前から行われてきた過酷な労働にまつわる個人的記憶の想起を促しており、記憶装置として働いていた。そして、強制労働という観点から、個人的記憶と、異なる集団がもつ集合的記憶との接点が見出されたと考えられる。

4.2　炭鉱と社会構造の話

次は、別の観点から、個人的記憶との接点を見出した参加者の語りをみていこう。

> 今日のツアーは凄く良かったです。私が小学校の時は、係が石炭を運んで入れるストーブだったんですよね。私の生活も石炭が支えていたんだなあと思い出して。身近で起きていることと社会構造の繋がりというか、構造を変えていかないと身近なことも変わらないし、身近なことを変えれば構造が変わるのか、じゃあ石炭無しで私たちは暮らせたのかとか。誰もそういう目に遭わずに暮らせる社会を、ダークツーリズムを通して考えさせられました[13]。

►13　2021年10月、参加者J氏の感想より抜粋。

> 産炭地っていうのは、どなたかが仰ったように、国の政策で、猛スピードで変わっていったという時期がありまして、原子力だとか核のゴミ、再処理後のゴミですけども、今の流れと繋がる部分も結構あるのかなと[14]。

►14　2021年10月、参加者K氏の感想より抜粋。

前者の参加者J氏は、石炭を使って生活していた小学生の頃を想起し、そのうえで社会の構造に関して言及している。これは、想起された個人的記憶が、より大きな問題関心へ繋がることで集合的記憶へと組み込まれていく例であり、J氏は社会の構造が抱える問題を批判的に検討する視点を獲得したといえる。後者の参加者K氏は、石炭産業が国策であったことをふまえ、原発など現在の我々が抱える問題へと接続しており、エネルギー問題からツアーの意義を捉え返す視点を獲得したといえる。また、次に紹介する参加者L氏は、言葉として語りえない感覚的なものを認識していた。

> 奥深いものだと思います。色んな時代背景を考えるっていうかな、社会の構造とかの関連を考えたら、すごく難しい。今、僕の考察では無理ですね。はい、無理です。簡単に思うのは、たとえば、今ふと思ったんですけど、中学3年生まで新聞配達、朝刊やってたんですけど、高台に

上がるとどこの家も石炭の煙ですね。家へ帰ったら、このへん、汚れてます。そういう時代でしたね[15]。

総じて、参加者は、現在と過去の接点を探していることが窺える。「われわれの記憶が他人の記憶によって助けられるためには、他人がわれわれに証言を与えてくれるだけでは十分ではない。さらにわれわれの記憶が他人の記憶と一致しつづけていることが必要」（Halbwachs 1950＝1989: 16）で、こうした想い出が再構成されるとき、他人の記憶との間に「多くの接触点が十分存在」する必要がある。本稿の事例では、他者の記憶と、参加者自身の繋がりが、過去の経験に基づく個人的記憶の想起によって導かれていた。すなわち、記憶の継承は、他者の記憶を知識として受け継ぐだけでなく、現在の視点から過去の経験に基づく個人的記憶を想起し、それらが接点を持つことが重要である。

L氏はたびたびB氏のもとを訪れるようになり、筆者も後日再会し、関係性が続いている。2022年7月には、電話にて、L氏が頻繁に朝鮮人の慰霊碑や墓地をめぐっているという話を聞いた。ツアー以前からの行動なのか問いかけたところ、L氏は「ツアーがきっかけ」と答えた。

調べていくと、十勝、自分が住んでいる場所の近くにも、朝鮮人の跡があったんだよ。（中略）ツアーがきっかけ。それまでは、関心がなかった訳じゃないけど、そこまで日常に入るという感じではなかったね。それが、日頃から朝鮮人の問題を考えるようになってきた。十勝では、囚人労働はよく語られるのに、朝鮮人の話は出てこない。やっと、自分の暮らしの中に入ってきた感じがあるね。一日予定が無いとき、それじゃあ近くのところ（筆者注：慰霊碑や跡地等）、行こうかなってね[16]。

L氏のほかに、D氏も道内にある朝鮮人の慰霊碑をめぐるようになったと言う[17]。D氏の根底には、幼少期に三笠で遊んだ記憶や、自身の母親が人種差別に立ち向かう態度を身近で見た経験があり、過去の経験に基づく個人的記憶の想起によって、問題と自身との接点を見出していた。参加者の中には、以前からA氏とともに活動をしていた人が一定数みられたが、彼らだけでなく、記憶の想起と接続によって新たに興味を持ち、行動に移していく人の存在が確認できた。

4.3　A氏にとってのツアーの意味

最後に、ツアーを企画したA氏自身にとって、ツアーがどのような意味を持ったのか、考察を深めたい。A氏は、2021年の夏に、北海道の炭鉱の施設や住宅の跡地、石炭を積みだした港の跡地を訪れていた。その時の感想を次のように語った。

（筆者注：炭鉱の跡地へ行ったとき）草が生い茂って跡形もなくて、名もなく打ち捨てられた人がそこにいるんだということを改めて知った。

►15　2021年10月、参加者L氏の感想より抜粋。

►16　2022年8月4日、参加者L氏への聞き取りから抜粋。電話にて聞き取りを行った。

►17　2022年4月9日、参加者D氏への聞き取りから抜粋。聞き取りは、江別市内のカフェにて対面で行った。

私は、私の歴史と出会う旅があるんだなと。そういう場所へ行くことは、私にとっても意味のある旅になります。なぜかっていうと、何もわからない、言葉もわからないで連れてこられて、還れない。朽ち果ててもそこにいて、還れない遺骨がある。何か残してあげないと、という気持ちがある[18]。

►18　前掲►6

在日朝鮮人2世であるA氏は、自身の故郷に還れない複雑な事情を抱えている。故郷の住所が判然としないことや、田舎にある故郷までの経路が確保されていないことなど、様々な要因が重なっているという。A氏は、故郷へ還れない朝鮮の人々に対して、自身の境遇を重ねていた。

A氏は、先述したように、慰安婦問題の解決を目指す団体の共同体表を務めている。A氏の社会的な状況から、A氏が参加者に対して、炭鉱での朝鮮人の強制労働と慰安婦問題に目を向けてほしいと願っていることは推察できる。しかしながら、こうした社会的な背景のみに限らず、今回のツアーでは、「還れない」というA氏自身の個人的な記憶が垣間見えた。ツアーの中でA氏は、還れない朝鮮人に向けて慰霊の儀式を行ったが、彼らを慰霊することは、A氏自身の個人的記憶の想起を引き起こし、朝鮮人コミュニティの集合的記憶に接続することでA氏自身を救う旅であったのかもしれない。

5　おわりに

本稿は、炭鉱遺産のダークツーリズムを事例として、いかなる負の記憶が、どのように個人に受け入れられ共有されるのかという記憶の継承過程に光を当てた。具体的には、各ツアーの意見交換会で述べられた感想と、後日実施した主催者や複数の参加者への聞き取りをもとに、集合的記憶論を部分的に拡張した形で議論を深化させ、個人的記憶の想起と集合的記憶との接続という観点から集団の枠組みを超えて記憶が共有されていく過程を明らかにした。

それでは、本稿で明らかになった記憶の共有過程を整理しておきたい。第一に、参加者は、B氏の証言と炭鉱遺産を記憶装置として、負の記憶に関連する個人的記憶を想起した。個人的記憶は、想起と忘却のプロセスをとおして行われる、過去の選択的な再構成の結果である。そこでは、かつて所属していた集団の観点や、過去の経験と記憶が重要な役割を果たしていた。

第二に、参加者は、想起した個人的記憶と、ツアーで目の当たりにした負の記憶の接点を探した。そこでは、炭鉱遺産がもつ複数の負の記憶の中から、個人的記憶と関連のあるものが選択され、参加者は各々の観点から個人的記憶と集合的記憶を接続していた。異なる集団によって保持されていた集合的記憶を、すべての範囲において共有することは難しいが、記憶を接続して部分的に受け入れることで、共有できる部分を増やしていける可能性がある。

こうして、異なる集団の観点を保持する人々が、負の記憶を共有していく過程が明らかになった。

記憶の共有過程では、他者の記憶を知識として受け継ぐだけでなく、個人的記憶の想起が求められる。そして、個人的記憶が、これまでとは異なる集団の観点をもつ集合的記憶と接続されることで、はじめて記憶を共有できる。したがって、記憶の共有過程では、個人的記憶と集合的記憶の接点を意識することが重要である。

こうして本稿は、ダークツーリズムにおける負の記憶の継承過程の一端を明らかにしてきた。最後に、記憶の継承に関して考察を深めたい。朝鮮人コミュニティの集合的記憶を自身の個人的記憶に重ね合わせたA氏は、その集合的記憶を継承するためのツアーを開催した。ツアーの中でA氏は還れない朝鮮人に向けて慰霊の儀式を行ったが、彼らを慰霊することは、A氏自身の個人的記憶を朝鮮人コミュニティの集合的記憶に接続することで、A氏自身を救う旅であったと考えられる。同時に、A氏はツアーを開催することによって集合的記憶の継承を試みていた。そして、B氏も、人々から聞いた証言を参加者へ伝え、記憶の継承を行っていたといえる。

異なる集団に属している人々が、集合的記憶を共有することは難しい。しかしながら、個人的記憶の想起と、集合的記憶への接続という過程を経ることによって、当事者意識をもって負の記憶と向き合うことができる。今後、ツアーの参加者が、強い感情とともに、負の記憶を後世に継承していく可能性も十分に考えられる。こうして、A氏やB氏が実践したように、記憶の共有が繰り返されることで、記憶は継承されていく。

本稿は、一つのツアーのみを事例として扱った。しかし、観光者が触れる記憶はすでに取捨選択されていることから、同じ地域で開催されている他のツアーとの比較検討や、それらの力学関係を視野に入れることで、さらなる研究の発展が見込まれる。これらは、今後の研究課題としたい。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。なお、本稿はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2119の支援による成果の一部です。

参考文献

Assmann, Aleida, 1999, E*rinnerungsräume: Formen und Wandlungen des Kulturellen Ged ächtnisses*, dritte auflage, München: C.H.Beck.（安川晴基訳，2007，『想起の空間――文化的記憶の形態と変遷』水声社.）

東浩紀，2013，『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン.

文化庁，2022，「『日本遺産（Japan Heritage）』について」，文化庁ホームページ，（2022年5月2日取得，https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/）.

藤巻正己，2019，「〈観光のまなざし〉が向けられる〈ダークな記憶装置〉としての日本統治期の建造物と旧『眷村（けんそん）』――台湾のツーリズムスケープ瞥見（1）」『立命館大学人文科学研究所紀要』（121）：33-75.

深谷直弘，2014，「被爆建造物の保存と記憶の継承――長崎・新興善小学校一部校舎保存

問題を事例に」『社会学評論』65（1）：62-79.
Halbwachs, Maurice, 1950, L*a mémoire collective*, Paris: Albin Michel.（小関藤一郎訳，1989，『集合的記憶』行路社.）
浜井祐三子，2017，「記憶のメディア文化研究に向けて」浜井祐三子編『想起と忘却のかたち――記憶のメディア文化研究』三元社，1-24.
筈谷友紀子・阿部大輔，2019，「空間の残存程度からみた悲劇の記憶の継承メカニズムの考察――ハンセン病施設の保存に着目して」『都市計画論文集』54（3）：600-6.
――――，2021，「空間の残存と悲劇の記憶の継承メカニズムの関係性に関する考察」『日本都市計画学会関西支部研究発表会公園概要集』19：57-60.
井出明，2018a，『ダークツーリズム――悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎.
――――，2018b，『ダークツーリズム拡張――近代の再構築』美術出版社.
いろは出版編，2016，『人類の悲しみと対峙するダークツーリズム入門ガイド』いろは出版.
上水流久彦編，2022，『大日本帝国期の建築物が語る近代史――過去・現在・未来』勉誠出版.
川野徳幸，2018，「継承の課題――何が継承できるのか、何を継承するのか」『IPSHU Research Report Series』（33）：99-114.
経済産業省，2008，「近代化産業遺産群続33――近代化産業遺産が紡ぎ出す先人たちの物語」，経済産業省ホームページ，（2022年5月2日取得，https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/kindaikasangyoisan/pdf/isangun.pdf）.
木村至聖，2013，「生活戦略からみる炭鉱社会像の再考――北海道岩見沢市朝日町における『出面取り』の事例から」『甲南女子大学研究紀要　人間科学編』（49）：121-31.
――――，2014，『産業遺産の記憶と表象――「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会.
窪田亜矢，2014，「水郷の商都・佐原における『記憶の枠組み』についての研究――『歴史的なもの』との関係をふまえた考察」『日本建築学会計画系論文集』79（705）：2443-52.
Light, Duncan, 2017, “Progress in dark tourism and thanatourism research: An uneasy relationship with heritage tourism.” T*ourism Management*, 61, 275-301.
松浦雄介，2018，「負の遺産を記憶することの（不）可能性――三池炭鉱をめぐる集合的な表象と実践」『フォーラム現代社会学』17：149-63.
三笠ジオパーク，2022，「三笠エリア～開拓を担った囚人たちの足跡」，三笠ジオパークホームページ，（2022年5月2日取得，https://www.city.mikasa.hokkaido.jp/geopark/detail/00003767.html）.
三笠市立博物館，2022，「展示室5【集治監と囚人】」，三笠市立博物館ホームページ，（2022年5月2日取得，https://www.city.mikasa.hokkaido.jp/museum/detail/00001409.html）.
宮坂道夫，2020，『対話と承認のケア――ナラティヴが生み出す世界』医学書院.
水島久光，2020，『戦争をいかに語り継ぐか――「映像」と「証言」から考える戦後史』NHK出版.
Nora, Pierre, 1984, “Entre mémoireet histoire: la problématique des lieux,” P. Nora ed., L*es lieux de mémoire t.1: La république*, Paris: Gallimard.（長井伸仁訳，2002，「記憶と歴史のはざまに」『記憶の場――フランス国民意識の文化＝社会史　第1巻　対立』岩波書店，29-56.）
齊藤公輔，2007，「集団的記憶研究の素地」『独逸文學』51：239-62.
清水肇・中村友美，2018，「地域の記憶継承のための歴史的資産のあり方の検討――戦後の強制移転を経た沖縄県読谷村K集落での取り組みから」『都市計画論文集』53（3）：1267-74.
安川晴基，2008，「『記憶』と『歴史』――集合的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』94：282（85）-99（68）.
吉岡宏高，2012，『明るい炭鉱』創元社.

データベース

どうしんDB，2022，「北海道新聞データベース」，北海道新聞ホームページ，（2022年5月2日取得，http://www.aurora-net.or.jp/services/DB/index.html）.

（令和4年5月2日受理、令和4年9月20日採択）